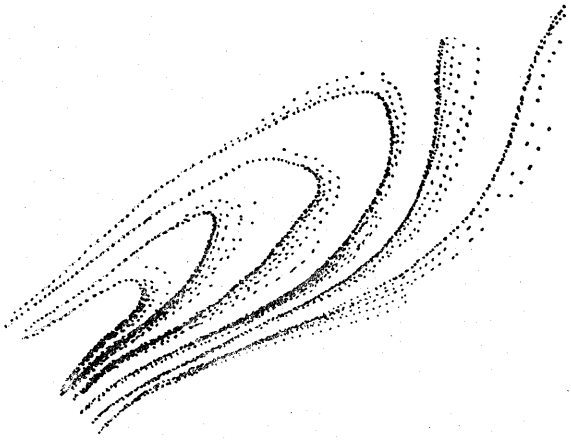
幼児期のあれこれ

関根　慶子



編集部のお求めに応じて、久しぶりに自分の幼児期を遙かに顧みると、第一に思い浮ぶのは、甚だ芳しからぬ次の一件なのである。それは春か秋か、寒くも暑くもない頃であったらしい。ある日のこと、私はいつものように母のつくってくれたお弁当を持って幼稚園に行くため家を出たのであるが、とうとう幼稚園には行かず、近所の仲よしの子と道ばたで遊んでしまったのである。その子は「ふうちゃん」といって、私と同じ年頃の女の子で幼稚園には通っていなかった。偶然「ふうちゃん」に出会ったのか、それとも私が幼稚園に行くのがいやになって、「ふうちゃん」を誘い出して遊んだのか、そこはいま記憶にはっきりしない。子供のことで隠す意志もなかったとみえ、いつも通る通園通学路の、しかも家に随分近いあたりの道で堂々と楽しく遊んでいたのである。

私どもの家は本郷区森川町で、東大正門の前をまっすぐ西へ入り、小祠につき当るとその垣に沿って後に廻った奥にあった。森川町に隣接する西片町の「誠之幼稚園」というのに、大正四年前後の頃通っていたのである。さ

らに少し歩を進めた所に「誠之小学校」があり、両者とも今も同じ場所にあるが、幼稚園の方は「文京区立第一幼稚園」と名称を改めている。その幼稚園まで幼児の足では二十分程かかったろうが、遊びほうけていた路上は家から五分とかかりそうもない地点で、西片町に入る手前のゆるやかな坂になっている所だった。「ふうちゃん」は素直ないい子で、幼稚園の友達よりも愉快に楽しく遊べたものらしい。二人で何をしたのか詳細はおぼえていないが、おそらく手毬をついたり、石けりをしたり、持物をそこで拡げたりしていたものらしい。その辺は当時の静かな住宅地で、人通りは多くないものの、普通に通行人はあったわけだが、そんな道端で子供が遊んでいても何ら不思議はないから、誰もとがめだてする人はなかった。

時の経つのも忘れて遊びに夢中になっているうちに、お腹が空いて来たのか昼食時になったかして、持っていたお弁当を食べ始めた。多分「ふうちゃん」と半分こにしたのだろう。ところが上述のように、そこは通学路にあたっていたから、私より三つ年長の兄と二つ年長の姉が、相ついで小学校から帰って来て通りかかり、当然見つかってしまって鳧(けり)となったのはいうまでもない。早速家に連れ戻されて、きつく叱られたに違いないが、あとのことは全然おぼえていない。兄姉に見つかった時の、子供ながらも困惑した自分の顔、そこまでしか記憶は辿れないで、「ふうちゃん」と意気の合った遊びのあの楽しさだけが、今も私にとってひそかに大切な思い出なのである。

こんな非行（?）に関係があるのかないのか、またある日、幼稚園の運動場で何か一人で練習していた私は、向うの渡り廊下に、ふと母の姿を見つけた。保護者会の日でもないのに母がやって来たのは、とにかく園児としての私の成績のすぐれないのを心配したからであったろう。私は遊戯や手工など何れも下手で一向に上達しなかったらしい。生来無器用で、運動神経もにぶく、社交性も乏しいというのが、幼児期からこの老年にいたるまで、私の性向というべきものだろう。だから幼稚園でも

楽しい筈はなく、いわゆる落ちこぼれか劣等生というところであったろう。そこで母は心配して、あの時姿を現したのであったらしく、私も幼いながら母にすまないような恥しいような、もの悲しいほろ苦い気持をかみしめて見やっていたことを、ほのかに思い浮べるのである。私には内気な所と大胆な所と両面が同居していて、気弱でありながら、幼稚園をさぼって道路で遊ぶような大胆な行動を敢てすることもあって、この両面は今も明かに自分の中に共存するのを折にふれ確認せざるを得ない。

だから幼い一時期、ひどく多弁能弁の傾向もあったという。それはむろん自分では意識しなかったが、眼科医に通っていた頃、その医院で余りよくしゃべるので、そのお医者さんは、「このお嬢ちゃんは今に女弁士になりますよ」と言われたという。後年母は私によくその話を聞かせて、それなのに今のお前はどうしてそう訥弁なのだろうと、成人してからの私の話下手を嘆いたものである。遠い昔のことで実におぼろげな記憶であるが、そう言われれば、硝子戸をがらりと開けると、にこにこ顔のお医者さんがおられるので、図に乗ってしゃべると、みんなが笑った、というようにかすかな記憶がよみがえるようにも思えるのである。

なお幼児期のあれこれを思い出すままに漫然と書き連ねることとしよう。

悲しく辛かった思い出は、冬になると段々と手の甲がお餅のようにふくれあがり、霜焼けのできることであった。今の子供には余り見ることができないが、ひどくなると血が噴き出したり崩れたりするのである。それ程でない時も、日中ぽかぽかと暖かくなって来たりすると、痛がゆくなって来てまことに不快なものだった。その霜焼けは足の指や踵にもできて悩まされるのであった。それは幼児期の苦痛の一つであった。もっとも、体質によって霜焼けのできない子もあって羨ましかったものである。ひびだけ切れる子、ひびと霜焼けの両方に悩まされて泣く子も少なくはなかったのである。

が、木枯らしが吹いてお正月用の門松や笹の葉がさやさやと鳴る頃は、幼い心もときめいて楽しみが一ぱいあ

った。まず思い出されるのは、母のお伴をして正月用の買物に行ったこと。東大正門前の電車通りを、本郷三丁目の少し先まで行くのである。母の行くお店は大体きまっていた。電車通りに歩いて一番近い下駄屋にまっ先に入る。お正月用の下駄を女中さんのも含めて家族全員のを買い整えるのがわが家も習慣であったらしい。鼻緒と台を別々に選んで、それぞれに鼻緒を据えて拵えて貰うのである。下駄屋さんの器用な手つきを見ていると、なかなか面白く、忽ちに格好いいきれいな下駄ができ上るのであるが、それらが全部できあがらぬうちに下駄屋さんを出て次のお店へ行く。十何足ぐらい注文した下駄は、あとで一括して家へ届けられるのであった。それらを一箇所に積み上げて置いて暮のうちに履いてはいけないのであった。今見る靴やサンダルなどと違って、正月を待つ新しい下駄には格別の味があった。きれいな塗下駄や畳表の駒下駄、いきな鼻緒、いかつい大きな、木の香も新しいような男下駄、それらを時々ちらちらと見やりながら幼い心も浮立ってくるのであった。

当時の日本には、クリスマスの行事など殆どなく、本当のクリスチャンの家庭でなければ何も関係ないのである。せいぜい絵本にサンタクロースなどが登場して、子供心をメルヘンの世界に誘うのであったが、わが家も父が無宗教であったから、無論クリスマスは知らなかった。青年時代に我々は内村鑑三先生の門をくぐってキリスト教に入信して今日にいたったが、幼年時代は全くの無宗教で仏壇や神棚に向って手を合せた憶えも殆どないのである。

「もう幾つ寝るとお正月」のあの歌詞通り指折り数えてお正月を待つ。大晦日にはおせち料理の匂いが漂い、枕元に晴着を揃えると、子供にはもう用はないのである。それでも母達の忙しそうなのを気にしながら、床に入ったようである。当時は、元日から三ヶ日ぐらい昼間は門を開き、本玄関の戸も開け放しておいたものである。年始の客が黙って名刺を置いて行かれるように、六曲屏風などを立てた前に名刺受けの美しい塗盆を置いていた。そうした正月らしい気分も幼な心には快かった。そして

子供達は面白がって時々その名刺受けをのぞきに行き、誰々さんがいらした、などと余計な報告をするのであった。お正月の幼少時の遊びは、室内では双六や坊主めくり・伊呂波がるた、勝負にお菓子や密柑を賭けたりもした。戸外では羽根つき凧上げである。それをするのにあのお正月の下駄を履くのが嬉しかったが、当時は道が悪かったから、泥がはねて新しい下駄が汚れるのがうらめしかった。三ヶ日が過ぎ、やがて七草がゆの日も終ると、もうあとは普通の日ばかりになってしまうのかと思って、妙にうら悲しく名残惜しくてならないのであった。これらお正月の思い出は幼稚園から小学校にかけてのことであったろう。

長姉は父の先妻の長女であったから、後妻の末娘である私よりも二十余も年長であったので、私の幼児の頃お嫁に行った。その婚家先へ泊りがけで遊びに行くのは、またとない楽しみだった。やさしいきれいな姉が色々ともてなし一緒に遊んでくれる。いいお姉さんだなあと思う。とかく時間をもて余しがちな子供にとって、よその家へ行って遊ぶだけでも変化があって面白いのに、夜になるとわが家とは違う雰囲気の中で、違う蒲団に包まれて寝るのが珍しく嬉しかった。そしてお別れには、リボンとかお手玉とか千代紙・折り紙といったお土産まで貰って、やさしい言葉に送られて帰ってくるのであった。

戸外の遊びも忘れられない。春日遅々、綿入れのちゃんちゃんこなども脱ぎ軽やかなへこ帯姿となって、兄達を先頭に立てて摘み草に行くこともあった。そんな時は、子供としては遠出なのがまた嬉しい。その頃は、本郷あたりにも自然の花咲く野原があり、田園風景の残っている所があった。そんな所でのんびりと半日を過して来る日もあったのである。常時行っては遊んだ近い広場のことも、脳裏に鮮明に残っている。家の西側は少し進むと急坂となって低地に下りるが、その向うの高台一円は「西片町十番地」で、福山藩の阿部邸があり、北方に折れて進む方向には誠之幼稚園・誠之小学校があった。阿部邸の門前は広場になっていて、ほぼ中央には有名な「大椎樹」があった。そこへ行くには、家の角を少し北

に進んで左に折れ、前述の「ふうちゃん」と遊んだゆるやかな坂を通って行くのであった。子供の足でも十分ぐらいで行けたろうか。その広場は子供達に格好な運動場となった。我々もよく行って遊び、鬼ごっこや駆けっこにのびのびと駆けずり廻り、広いので何でもやれた。勿論それは幼稚園から小学校時代に続いてのことである。中央の椎の木は、そのころ樹齢四百年ほどで樹高五丈ばかり、子供の目にもとてもみごとな大木で、そのどんぐりを拾ったりもした。広場に面して大門を構えている阿部邸の庭内には稲荷があって、二月初午の日には、幟旗などを立てて町民に庭を開放したので、その広い立派な庭の築山や池のほとりを我々もとび廻って遊び、白い紙包のお菓子をいただいて喜んだりもした。

子供はお祭りが好きなものである。というより、遅い時間の流れに退屈している子供は変化を好んだのであったかもしれない。むろん宗教的な意識などなく、その行事に興味があったのである。わが家に近い、先にも触れた小祠は「映世神社」といって、前に御影石の大鳥居が立っており、漱石の「三四郎」にも「森川町の神社の鳥居の前」などと出てくる所であるが、三州岡崎の城主本多氏が藩祖を祭ったもので、鳥居に向って右手に本多邸が静まり返っていた。今は神社も本多邸も跡形(あとかた)もないけれども。その神社の境内には四季折々の花々が咲き移り、ぐるりと一周できるような独立した一円をなしていたので、垣に沿って走り廻ったり、中を覗き込んだり、かくれんぼをして垣の際にうずくまったりした。幼い日に結びついて忘れ難い場所であったが、祭礼の日以外は門を閉じ、夜は真暗で、時には中で変事(心中・自殺など)が起ったという噂も流れたりして、一面何か暗い印象もあった所である。秋の祭礼の時は楽しかった。九月なので未だ暑い時もあったが、少しこぎれいな着物に着かえて、近々と聞える太鼓の音に促されるようにして、夕方からお神楽などを見に行くこともあった。神代の勇者の猛々しいしぐさや優雅なお姫様の姿に目をみはり、怖い鬼や悪者の姿に恐れたりもしたが、殊に面白かったのは、おかめ・ひょっとこの顔や所作などであった。

森川町の氏神は根津神社で、旧制一高の近隣のあたりにある。その祭礼の日は、色々な美しい見せ物が出たが、一方には目を覆いたい気の毒な身体障害者の姿をわざと見せ、地べたに坐って物乞いをする人々もあった。幼な心にも、人生の明暗を肌で感じさせられるようなものがあった。だが広い境内や近くの道路には、臨時に設けた沢山の店が立ち並び、客を待って賑っていた。そうした中でも、大きくふくれあがった綿飴や、鉢などの道具を型どった飴などが特に幼児の目をひいたようである。一度だけでも口にしてみたいと思ったのに、不衛生だとか母は言って、小学校時代に入っても、ついに一回も手にすることはできなかった。弟などは、やっとラムネを買って貰ったようだったが、我々女の子は、うまくいっても酸漿か大抵の場合は千代紙・おはじきといった変りばえもないものに終った。根津神社のお祭りは楽しいというより、疲れて足を引きずって帰って来た時の、何やらものうい印象が残っている。人ごみの嫌いなわが性は幼より老にいたるまで変らないのであろう。

幼児期に重い病気としてジフテリヤにかかったことがある。相当長い期間、病院に入っていた。その病苦については、おぼろげにしか思い出せないが、嬉しかったことは、看護婦さんに可愛がられたこと、また特に退院の時、人力車に乗って看護婦さんの膝の上で、両手に抱えきれないほど沢山のきれいな色彩にあふれたお土産を持ち帰った時のことである。それはおもに色々の折り紙で折った鶴亀や兎や馬や車やお家など、それから千代紙のお人形か紙風船などの紙製品であったように思い出される。病気の直った快感の上に、やさしい看護婦さんの膝に抱かれて飛ぶように走る人力車、それに目に楽しい美しい色の紙作品をお土産に急ぐ久しぶりの家路、それらが幼い心にこの上ない満足感を与えたものらしく、あの時のことは、兄弟の中でも自分だけの知り得た醍醐味でもあるかのごとく、大切に私の胸のうちにしまわれていて、何かの折にふと人知れず思い浮べるのである。

金魚屋や苗売りの節廻し豊かな声や、風鈴屋のリンリン・リリーンという涼しい音、それらは幼い時の風物詩

ともいうべく、それらの声が巷に響くと、子供らは道路にとび出して眺めた。思うようにそれを買っては貰えないのだけれど、赤やまだらの美しい金魚、短冊型の色紙を下げたきれいな大小の風鈴、それらは見るだけでも面白く、今はなつかしい思い出である。

夜の闇は、幼児にとってやはり恐ろしいものであった。電灯はあっても今のように明るくないから、寝る前に暗い厠に行かねばならないのも苦になった。夜道から聞えて来る「あんまーはーり」(按摩・鍼)の太い声と、からころというその盲人の下駄の音、それらは幼い私にとって怖い夜の象徴ともいうべきものだった。「あんまはり」の声が聞えて来ると、母はきまって「さあさあ寝ないと連れて行かれますよ」と寝しぶっている子を促すのであった。

思えば、我々の幼児期の思い出は、主として母と共にあった。父は学者で身体も弱く、外出以外は殆ど書斎に籠りきりであった。我々が長じてからは、きびしいがやさしい父で理解もある親として私には映り、尊敬もした。しかし、我々の幼時にはわが子を抱くことも殆どなかった由で、後年、兄の乳母だった人が訪問して来た時、孫を膝に乗せた父を見て驚いた程である。母は書斎の父に聞えないように、子供のやかましく泣く時は、遠い部屋に連れて行くなどの苦心もしたようである。だから幼児期の父との接触は余り記憶になく、ただ母について書斎に行くと、机に向っている和服姿の父があり、言葉ぐらいは交わしたこともあったろう。そんなわけだが、父の存在感は重かった。私の幼時には、父は存在するだけで十分意味があったのであり、青少年期となると、父との接触、父との思い出は、顕著に具体的なものとなるのである。終りに一言つけ加えておきたいのは、これらの私の幼児期は、悲喜両面があったのであり、楽しいこと喜ばしいことと、悲しいことやるせない思いは相半ばしていたと言えよう。人の世の明暗、わが家の明暗、自分自身の明暗をも、それとなく感じとっていたということであり、それは幼少時と雖も当然また必要なことであったと考えるのである。